

『枕草子』と『大鏡』を読む

―すべてを書く、すべてを語る意志―

●相模女子大学

風間誠史

(かざま・せいし)

新しい三省堂『高等学校 古典講読』には、源氏物語・枕草子・大鏡と平安時代の「古典」が並んでいる。『源氏』と『枕』については、「古典」の代表として並列することに疑問はないだろう。だが、『枕草子』の次に『大鏡』が来るのはなぜだろうか。

教科書を繰ってみよう。『枕草子』は、巻頭の「春はあけぼの」から始まり、ものづくしの章段がつづいてゆく。「すさまじきもの」「木の花は」「鳥は」「あてなるもの」「ありがたきもの」……と読み進めて行くと、「繊細で鋭敏な感覚と、独特の美意識」という教科書的な解説では処理しきれ

ない、日々の生活の中での体験や感じたことを書きつづけてうとする、偏執的なまでの意志が感じられはしないか。「あてなるもの」として「削り氷に甘葛入れて、あたりしき金椀に入れたる」「梅の花に雪の降りかかりたる」「いみじううつくしき児の、いちごなど食ひたる」といった、偶然的な一場面、あるいは瞬間がリストアップされてゆく。そしてそれは書き留められることで、必然となつていく。そうした偏執は随筆的章段でも変わらない。「九月ばかり」では、萩の葉の露が落ち、反動で枝が上にあがる瞬間を「いみじうをかし」と捉え、そう感じた瞬間に、こんなことは他の人には面白くもないことだろうと思ひ、さらにそう思ったことが「またをかしけれ」と記される。露が落ちたのも、それを見て思ったことも一瞬の出来事である。その一瞬に込められた豊かさが、今の私たちの心に伝わってくる。

『枕草子』末尾にはその成り立ちを記した一文が置かれている（「この草子、目に見え心に思ふことを」）。ここでは、紙をもらったが何を書こうかと中宮定子に問われた清少納言が、「枕にでもしましょう」と言った有名な一節がある。ここで注目されるのは、清少納言への問いかけの言葉に、「上の御前には、『史記』といふ文をなむ書かせ給へる。」とあることだ。つまり『枕草子』は『史記』に対抗して、と

いうと大げさだが、少なくともそれを意識して書かれたものだということになる。そしてそれは必ずしも的はずれとは言えないのではないか。一人の人間が、自分の経験を総動員して「目に見え心に思ふこと」を「書き集め」る行為において、両者には確かに共通するものがある。司馬遷の『史記』への思いを清少納言が知っていたかどうかはともかくとして。

さて一方、『大鏡』は、言うまでもなく紀伝体の、つまり『史記』に倣った歴史語りである。冒頭の「雲林院の菩提講」において、大宅世継と夏山繁樹という、超越的な語り手を虚構し、そのことによつて藤原道長の栄華とそこに至る様々な出来事を徹底的に語り尽くそうとしている。つづく「かくて講師待つほどに」で世継は、道長の栄華を語るためには「あまたの帝王・后、また大臣・公卿の御上を」語る必要があり、そうすることで「世の中のことの隠れなく」明らかにできると断言している。ここにもまた、語ることへの偏執、「世の中のこと」を「隠れなく」語り尽くそうとする意欲が見られる。そして彼は「いみじうこそ」（まさに偏執的なまでに）「言ひ続け」るのである。

『大鏡』は通常教科書で読まれる際には、どうしても面白いエピソードを断片的に取り上げられるかたちになり、歴史物語というより説話集、あるいはゴシップ集的な面が印象に

残るのではないか。しかし本来『大鏡』は「歴史」を語り尽くそうとする書なのである。この『高等学校 古典講読』では、藤原道長伝の発端部を「強運」というタイトルで採録しており、そうした『大鏡』本来の姿を垣間見ることができる。道長の出自、昇進の経緯がいわば事務的に記され、その後道長の出世の契機となった疫病による大臣・公卿の死亡記事が続く。読んで面白いかと言われると困るが、『大鏡』が道長をどう扱っているかを見るうえでは重要である。有名な「競射」の段では、道長の器量が強調されるわけだが、『大鏡』は人物の器量だけで成功するといったロマンチックな見方はしていない。「姉、詮子」の段では、道長の関白就任が天皇に対する詮子の強引なまでの説得によるものだと語る。道長の栄華を語ることが目的だと述べているが、それは道長びいきの歴史を記すことではない。道長の栄華に至るさまざまな要素をとらえ、その総体を語ることが「歴史」だと考えているのである。

このように、自分の見たこと、知ったこと、感じたことを書きつくそう、語り尽くそうとしたという点で共通する『枕草子』と『大鏡』は、その「見聞」において重複する対象を持った。『枕草子』においては中宮定子の兄弟として、『大鏡』では道長の競争相手として登場する、藤原伊周・隆家の二人である。前者においては、宮廷サロンにおける教

養と機知を代表する、いわば理想の男性として描かれた伊周・隆家が、後者においてはあからさまに道長の引き立て役となり、幼児的で無能無力な人物として描かれる。

もちろん、どちらが正しいということではない。どちらも正しいのである。『枕草子』は自分の見た通り、感じた通りの二人を描いたし、『大鏡』の語り手もまた、自分の得た情報を忠実に伝えているのだろう。『枕草子』の視野の方が一見狭いように見えるが、しかし、役割が固定されてしまった『大鏡』よりも自由な筆致ともいえよう。いや、『大鏡』の伊周・隆家だって、ある意味で愛すべき人物として描かれている。どちらも面白い。そしてどちらからも、「歴史」の生の声が聞こえてきはしないだろうか。